

「カーボン紙の復権 (1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

感染症の影響もあって、小学校の現場にも「一人一台」のタブレット PC やノートパソコンが配備されるようになった。機器は配備されたが、それを使えるように整備し、子どもに使わせる方法を考えるのは、各学校の仕事だ。学校やその校務分掌によっては、大幅に仕事が増えたはずである。



本校にも低学年には i-Pad が、中・高学年には「クロームブック」というノートパソコン型の機器が配備された。3年生もさっそくかなりの頻度で使用している。感染症対策の一つとして、対面での活動が制限される中、コミュニケーションツールとしても活躍しているのは事実である。

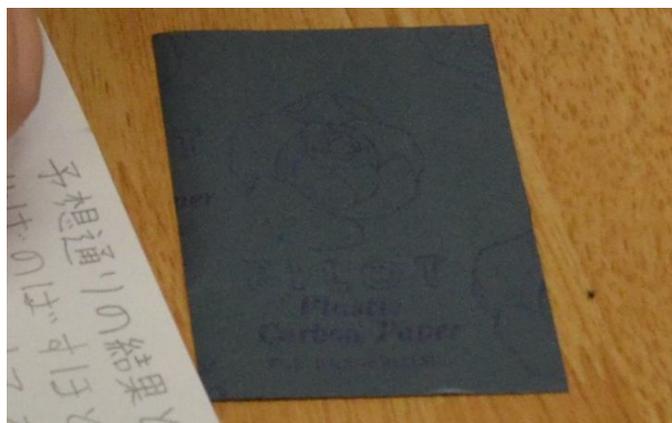


たとえばこれは、私のクラスで行っている、「プロジェクト活動」(てつがく創造活動の一つ)のページである。プロジェクトごとに「ルーム」があり、進捗状況や進め方の相談などを、ストリーム方式で書き込

むことができる。クロームブックにはカメラもあるので、作品やイラストなどを撮影して残すことも可能だ。教師も各プロジェクトの進捗状況をリアルタイムにチェックでき、コメントも付与できるので、活動の効率は飛躍的に向上した。

しかし私は、こうした ICT 機器とは別に、「付箋紙」という時代遅れの情報ツールも活用している。子どもたちが夏休みに取り組んだ宿題(オクラの観察や風で動くおもちゃの研究)の発表会の時に、互いにコメントを書くのに使ったのだ。

付箋紙は、相手にコメント(感想やアドバイス)を送るのに適している。相手のノートに、もらったコメントがすべて残るからだ。しかし送ったコメントは、書いた子ども自身のノートには残らない。そこが「付箋紙コミュニケーション」の欠点と言える。



そこで登場してもらったのが「カーボン紙」である。今でも宅急便の伝票などに使われている、あの複写用の用紙だ。今でも手書きの領収証の複写などに細々と使われているが、ほぼ絶滅したと言ってよい。



しかし今でも入手は可能で、A4 サイズ 100 枚入りで 2000 円程度だ。付箋紙用にはこれを 6 分割できるので、1 セットで 600 枚のカーボン紙を作れる。